

首里城正殿 向拝奥の彫刻物「牡丹に獅子・唐草」 復元についての研究 -後編-

上原 一明*・波多野 泉**・長尾 恵那***

A Study of Restoration of the Shuri Castle Main Hall's Inner Carvings
“Peony and Lion, Arabesque” Part II

UEHARA Kazuaki*, HATANO Izumi**, NAGAO Ena***

(Received September 26, 2025)

本論文は首里城正殿 向拝奥の彫刻物の令和の復元の実践として、新しい知見の基、新たに意匠された下絵の作業工程を記した前編に続く後編である。先ず平成時の復元とは異なる形状であるため、彫刻WG部会及び監修会議で決定された下絵を粘土原型により立体的に検証し、更に実物大のFRP模型を製作し、鴨居・長押・柱の模型枠に嵌めこみ検証する作業工程を記した。そして檜木を用いた試し彫りを経て本彫りに取り掛かり、実際の木彫刻の製作に至る課題や問題解決を中心に考察し、往時に製作された向拝奥の彫刻物「牡丹に獅子・唐草」の姿を明らかにする。

はじめに

首里城正殿 向拝奥の彫刻物の令和の復元の実践として、新しい知見の基新たに意匠された下絵の作業工程を記した前編に続く後編として、立体的に起こした造形を検証し、檜による本彫り製作に至る工程と検証について述べる。

1. 木彫刻の製作

本木彫刻製作は、山口大学受託事業として令和5年度と6年度の二年間に亘り採択した。本学の製作施設である工芸設計室を利用することや、本学学生にも参画してもらうことで、大学としての地域貢献や人材育成としての役割を担うこともできる。第一段階として、首里城復興基金事業監修会議彫刻WG部会の監修の下、沖縄県立芸術大学の長尾恵那氏が作製した下絵を基に粘土原型の製作で造形を確認し、完成後石膏型取り、FRP模型を製作した。第二段階としては、実際の檜材を用いた試し彫りを本彫り同様の彫刻刀で彫刻した。これらの検証を経た後、第三段階として本彫りを製作した。

1-1. 粘土原型の製作

今回の造形意匠は全く新しいものとなるため、波多野氏をはじめとする彫刻WG部会委員の監修の下、長尾氏が作製した下絵を粘土造形で立体的に起こす作業を担当した。参考とした写真は、大正時代に撮影された鎌倉芳太郎の透かし欄間の写真(図33)を観察しながら、その特徴を研究し造形した。また、当初平成復元時の彫刻物の写真を参考にしていたが、それらは踏襲しない方針とした。

粘土原型の製作手順として、先ず原寸大の印刷下絵を本彫りと同厚60mmの粘土板に写し取り、間を透かした(図34)。当初牡丹と獅子を浮き立たせる効果を狙い、唐草の部分を予め40mmまで落として造形した。その理由として、平成復元時木彫物の写真を見ると、中央牡丹の厚みより一段低く彫られていたからである。しかし、波多野氏から、最初から薄くするのではなく、本来の厚みを生かし抑揚を付けた方が良いとの指摘を受けた(図35)。確かにそれは適切であり、本彫りの際はそれを意識して彫ることができた。その後、彫刻WG部会からの要望により粘土原型は右サイドの牡丹と唐草を追加製作し、中央牡丹を含む右半分の実物大FRP模型を製作した(図36)。

* 山口大学教育学部, 〒753-8511 山口市吉田1677-1, uehara@yamaguchi-u.ac.jp

** 沖縄県立芸術大学長, 〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町1-4, hatano@okigei.ac.jp

*** 沖縄県立芸術大学美術工芸学部, 〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町1-4, nagao@okigei.ac.jp



図33 首里城 正殿正面唐破風欄間透彫
(鎌倉資料、部分)

粘土原型製作における木彫表現の限界としては、本来材質的に柔らかな粘土であるため、木彫におけるシャープな彫りの再現は困難であったが、全体的な造形の構成や抑揚、量感の確認は実現できた。



図34 中央牡丹と阿形獅子の粘土原型 (開始時)



図35 中央牡丹と阿形獅子の粘土造形 (完成)



図36 右サイドの牡丹と唐草の粘土造形を追加

1-2. FRP模型の製作

粘土原型を硬質な完成素材に型取りする方法として、石膏が挙げられるが、この場合芯に鉄線を入れる必要がある上、重量も有り、薄い板状だと割れやすい性質がある。FRP (繊維強化プラスチック、Fiber Reinforced Plastics) は軽くて丈夫であり、これらの問題はない上、運送にも適している。よって今回はFRP模型として型取りした。粘土原型完成後石膏型を取り、FRP模型を製作した。正面をFRP取りした後、裏面にもFRP板を貼ることで構造的により強固となり、厚みのある本彫り同様の量感を得ることができた (図37)。



図37 FRP模型の裏面

パテなどで穴を塞いだり造形整理などの修正を行い、木材色のカラスプレーで表面を塗装し、統一感をだした。更に薄いベニヤ板等で鴨居と長押、柱の仮枠模型を製作し、FRP模型を嵌め込んだ。そうすることにより、枠内に嵌った彫刻物の様子を再現することができ、本彫り作業に役立てることとなる。全てが実物大であるので、臨場感を以て確認することができる (図38、図39)。



図38 仮枠に嵌めたFRP模型 (正面)



図39 仮枠に嵌めたFRP模型 (斜め下面)

F R P 模型を実際に壁にかけて観察していくと、諸問題が明らかになった。粘土原型の時点では牡丹の花弁を舟の先端の様に尖らせて造形した。これは平成復元で造形されていた形を参考にしていたのだが、今回の意匠は前回と異なり、二つの獅子と二つ牡丹の追加と更に唐草がより密になった分、唐草のうねりは限定的になってしまう。また、花弁の先端を舟形にすると木材同士の接合部分が無くなり、部材同士が分離してしまうことで、構造体としての強度が落ちる問題が確認できた。またあまり先端が鋭利になると、木目の関係で欠落しやすくなる懸念もある。更に地板に接する彫刻側面上部の傾斜があると埃や水が溜まり、地板との接合面を腐食させる問題点も確認できた(図40の黄色円)。よって本彫りでは水捌けを良くするために傾斜は付けず、地板に対して垂直を保つようにした。

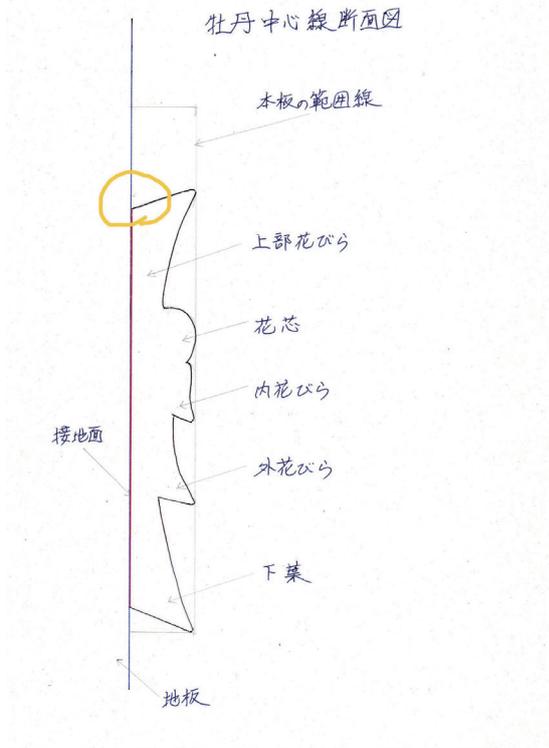


図40 F R P 模型の中央牡丹の断面図

向拝奥の彫刻物上部にある唐破風妻飾の龍の雲の表現をみると、雲の線画に沿った形で地板に対して垂直に造形されていることが確認できる(図41の黄色円)。雲を立体的に造形しない理由としては、太陽光線が強い沖縄の風土を生かした、輪郭の影を強調した絵画的要素が強い琉球彫刻の特徴ともいえよう。これは同じく太陽光線が強く、絵画的輪郭を強調させた古代エジプトのレリーフ彫刻にも共通する。

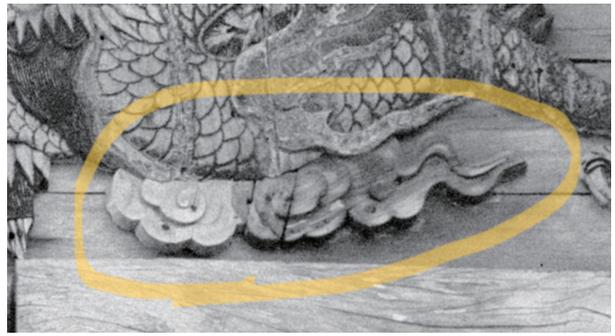


図41 唐破風妻飾の龍の雲の造形
首里城 正殿正面 唐破風 部分 (鎌倉写真、
原板/沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵、
沖芸大・東文研共同研究2024)

1-3. 試し彫りの製作

F R P 模型で造形の全体像を確認した後、首里城柱材建材の端材を用い、試し彫りを製作した(図42)。これも実物同様下絵を製材した檜板に張り付け、ドリルを用いて間を透かし、本彫り同様の作業工程で進めた。試し彫りは、中央牡丹と阿形獅子、右端の唐草の単独3枚で行った。粘土造形とは異なり、檜を彫刻鑿や彫刻刀で彫る製作であるため、本彫りを行う前の練習や検証に役立った。特に彫刻刀の彫り方において、牡丹の花芯や獅子巻毛の葉研彫りなど、刀を入れる角度や特殊な小道具の使用方法など、本彫り製作前の検証において大いに役立った(図43)。



図42 試し彫り (初期段階)



図43 試し彫り (完成)

1-4. 本彫りの製作

本彫り用の木材は、樹齢300年の尾州檜で、尚且つ12年間自然乾燥を経た上質な檜材であり、横幅3600mm、縦600mm、厚60mmのサイズである。横方向に4枚の柾目材を貼り合わせており、接合面は裏面でダボ材が入っている。予め下絵通りに間が抜かれた状態で山口大学の作業場へ入ってきた（図44）。



図44 下絵通り間が抜かれた本彫り用彫刻物

1-4-1. 唐草の葉裏の造形的工夫

本彫り製作にあたり、鎌倉写真でも確認できる往時の葉裏の造形的工夫がある。それは葉裏面と曲がった先端唐草芯が彫り出された接合面から、外に向って緩やかな皿状の面となっており、外側の輪郭をシャープな角度で保つことにより、葉の薄さを表現している点である（図45）。図46の断面図で示した通り、○Aが上部の透かし欄間の断面で表裏から見えるように彫っているのに対し、○Bは地板に張り付いた状態であるため、表から見える彫りとなっている。

また葉脈の表現についても、葉表は陰刻彫り（図45中央）であるのに対して、葉裏は陽刻彫り（図45左右）であることも、実際の葉を忠実に再現しており、尚且つ意匠的な工夫が見られるのも琉球彫刻の特徴であるといえよう。



図45 葉裏の造形（鎌倉資料、部分）

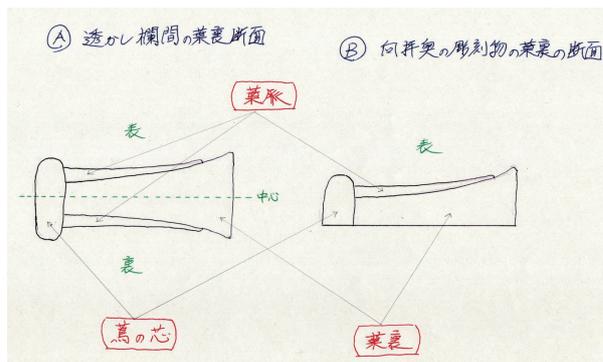


図46 葉裏の断面図



図47 本彫り右端の葉裏
（全体像は図62）

本彫り製作にあたり、特に両端の唐草と葉裏の範囲は平成復元時とは異なる全く新しい意匠のため、太い唐草の造形には起伏とうねりを入れ、先端に向かって螺旋状に浮き上がる造形を取り入れた（図47）。

1-4-2. 獅子の造形的工夫

獅子の彫刻については、沖縄県立博物館・美術館所蔵の円覚寺「唐獅子彫刻仏間羽目」の獅子を参考にした（図48）。特に卷毛の彫りに関しては、巻いた髪束の塊から細い線を葉研彫りで彫りだした（図49）。薄い浮き彫りの中で躍動感のある彫りが見受けられるが、絵画的要素の強い琉球彫刻の特色を再現する必要があるため、あまり立体的になり過ぎないように工夫が必要であった。またこの他に、前編前出の「図21 透かし欄間・正面の獅子（鎌倉写真より、部分）」をはじめとする透かし欄間の写真を丹念に観察し、往時の雰囲気と彫りの再現を行った。そこには絵画的要素を保ちつつ、薄いレリーフながらも輪郭線を明確に深く彫り、光の加減効果を考慮した絵画的立体表現の妙が見て取れる。



図48 円覚寺「唐獅子彫刻仏間羽目」の獅子



図49 本彫り 阿形獅子

獅子の尾の彫刻については、鎌倉資料の透かし欄間を参考にした(図50)。資料写真では、毛彫りの底は胡粉等が詰まっているようだが、本彫りでは薬研彫りで深く彫り、毛自体は多少丸みを帯びた毛線とした。最終的には少し丸みを帯びた巻毛に仕上げた。薄いレリーフ状であるにもかかわらず、絵画的立体表現とした陰影効果をおおらかに表現している。



図50 当初の尾の巻毛の造形(鎌倉資料、部分)



図51 尾の巻毛の造形(本彫り)

1-4-3. 牡丹の葉と花卉の造形的工夫

牡丹の葉については、図33の首里城正殿透彫の鎌倉写真をよく観察し、比較的意匠化された絵画的葉の表現を再現した(図52)。花卉は浅いスプーン状になっているが、葉は平らな面で角度をつけるようにした。

牡丹の花卉は葉とは異なる前出の浅いスプーン状にし、原則1弁3裂で構成された花びらで、根本から外側に向かって薄い皴の線を彫りこんだ。開花の状態が伺えるようにし、下絵通りに重なり合う様子を表現した。実際の留め付けられる状態を考慮し、上部の水捌けをよくするよう意識して彫った。

葉の陰刻彫りは、図45でも確認できるとおり、中央の葉脈線から左右に延びる葉脈の始点は交互にし、しなやかなカーブを描きながら深い薬研彫りを彫った。



図52 本彫り右側の牡丹(作業途中)

ここで平成復元時の中央牡丹の造形との違いについて述べる。それらは花卉や花芯が比較的写実に近い造形であり、花卉も薄く、花芯の一粒一粒は小さく丸く細やか

に縦横整然と並べ彫られていた。比較的華麗な中国様式となっており、図33の首里城正殿透彫の鎌倉写真とは趣を異にする（図53）。

今回の令和復元の牡丹の花芯については、下絵の通り簡素化され意匠化されたものとなっており、比較的大胆に造形された往時の雰囲気近づいている。中央の牡丹は立体的なドーム型の中に上部を中心に円を描くような配列とし葉研彫りで彫った（図54）。花卉の内側は中心に向かう皴のような彫りも入れた。両サイドの牡丹の花芯は縦横大胆な葉研彫りで彫った。粒の大きさは最終的に中央の牡丹と同様の大きさに仕上げた（図55）。



図53 平成復元時の中央牡丹の木彫刻
(写真提供 山本信幸)

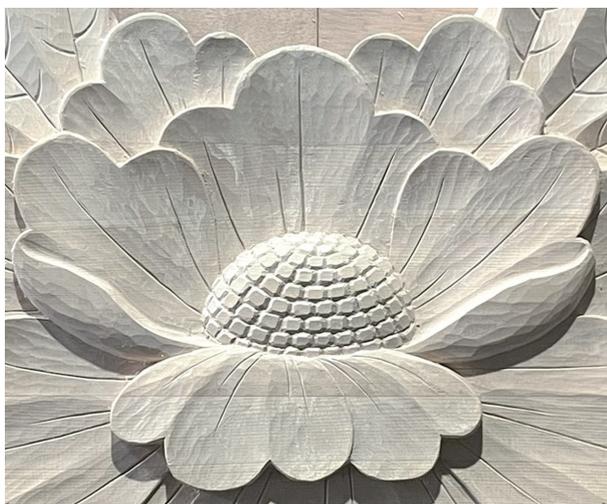


図54 本彫り中央の牡丹



図55 本彫り右側の牡丹

1-4-4. 本彫りの完成

令和6年6月より8か月をかけて本彫りは完成した。現物や写真も無いが故、下絵を見ながら粘土原型で形を把握し、試し彫りで檜材の材質感と彫刻刀の彫り具合を確かめ、写真資料・下絵・粘土原型・FRP模型・試し彫りの間を何度もフィードバックを繰り返しながら、本彫りに挑んだため、彫りに一刀の迷いも無く彫り進めることができた。尚且つ新たな造形の妙や、中央牡丹から両阿吽の獅子、左右牡丹、両サイドへと広がる唐草の伸びに至る全体的なバランスの優美さを感じながら作業をした。そのおかげで、多くの造形的発見と往時の造形感覚を捉えることができた。平成の復元である首里城正殿向拝奥の彫刻物「牡丹に唐草」（図7）においては、中央の牡丹と左右に伸びる唐草のみであったためか、どうしても弱い印象を受けていた。しかしながら、新たな知見により両獅子や左右牡丹が追加された今回の令和の復元「牡丹に獅子・唐草」となった本彫刻に至っては、より重厚感や密度を増し、左右の大型阿形・吽形の獅子と相まって堂々たる風格を放っている。

また、「神は細部に宿る」とはまさにこの事で、獅子の卷毛の一本一本、またその卷毛を身に纏う悠々とした両獅子、そしてそれらを護る優美な3輪の牡丹と躍動的な唐草の絶妙な組み合わせ。この首里城正殿 向拝奥の彫刻物「牡丹に獅子・唐草」は、琉球王国の栄華と繁栄を象徴するに相応しい木彫刻であるといえよう。

(図56・57・58・59・60)



図56 本彫りの完成（左サイド牡丹と唐草）
（全体像は図62）



図59 本彫りの完成（阿形獅子）
（全体像は図62）



図57 本彫りの完成（吽形獅子）
（全体像は図62）



図60 本彫りの完成（右サイド牡丹と唐草）
（全体像は図62）



図58 本彫りの完成（中央牡丹）
（全体像は図62）

まとめ

令和の復元における首里城正殿 向拝奥の彫刻物「牡丹に獅子・唐草」は、第1章で述べたように、新たに発見されたルヴェルテガ少尉撮影のフランス海軍古写真により、その全体像がより往時の図像に近づくことを可能にした（図8）。また、鎌倉芳太郎の鮮明な透かし欄間の写真資料により、「牡丹に獅子・唐草」本来の詳細な木彫刻の表現方法の確信を得ることができた（図21）。

監修会議彫刻WG部会の監修を経た長尾氏による下絵は、第2章で述べたように、数々の膨大な資料を調査した結果、その照合性の確かさを得ることができた。また最新のデジタル技術を駆使し、伝統的なアナログ方法の要素を保持しつつ、木彫刻し易い下絵を作成した。通常、絵師が描いた図像を立体的に彫刻する場合、彫り手にとっては造形的矛盾が発生してしまいがちであるが、彫刻家である長尾氏の下絵は立体的考慮がなされた描画であるため、木彫刻するにあたって全く造形的矛盾を感じなかった。それがまた彫りに一刀の迷いも無く彫り進めることができた要因の一つであったといえよう（図61）。

本事業は、不幸にも焼失してしまった沖縄の歴史的象徴としての首里城正殿の復興に対し、比較的早い対応で

官民一体となり運営された事や、これまで培ってきた経験や資料、更には日本国内外から多額の寄付金が寄せられた事も後押しされた。また、前回平成の復元ではあまり実現できなかった重要な事項がある。それは、可能な限り沖縄にゆかりのある技術者や職人、彫刻師を参加させたことにつきるといえよう。造形的にも琉球諸島という環境で生まれ育った人、或いは移住した人であるからこそ琉球独自の味わいを出せるからである。更に若手の人材育成という大事な側面も重要である。

今後の課題としては、今回の復興事業を継続的に維持できる環境を整え、若手の技術者並びに職人、彫刻師の育成の持続可能な体制を維持する事であろう。

本論文は、令和の復元において新しい意匠となった経緯と、それを基に描かれた下絵の工程を前編とし、その下絵を立体的に木彫刻製作する工程を後編として構成されている。前編の「はじめに」と「第1章」を波多野、「第2章」を長尾、「まとめ」を上原が担当執筆した。後編の「はじめに」と「第1章」、「まとめ」を上原が執筆した。尚、図に関しては前編・後編を通し番号で統一した。

謝辞：

本論文執筆にあたり、(株)社寺建代表取締役会長の山本信幸氏、沖縄県立博物館・美術館の伊禮拓郎氏、株式会社 国建の後藤なぎさ氏、沖縄県土木建築部 田邊朗仁氏他、多くの方々のご協力をいただいたことに感謝申し上げます。

参考文献等

- ・伊從勉「首里城正殿 平成と令和の復元の違い フランス海軍撮影首里城正殿写真の令和復元への寄与」2023年3月23日、首里城復元に向けた技術検討委員会 第2回報告会
- ・首里城復元に向けた技術検討委員会関連資料／令和元年度 第1回彩色・彫刻ワーキンググループ会議、令和2年2月5日
令和4年度 第1回(R4.6.7)、第2回(R4.8.25) 彩色・彫刻ワーキンググループ会議
- ・「首里城復元に向けた基本的な方針」2019年12月11日、首里城復元のための関係閣僚会議
- ・「首里城復興の基本的な考え方」2019年12月26日、沖縄県
- ・「首里城正殿等の復元に向けた工程表」2020年3月27日、首里城復元のための関係閣僚会議
- ・「首里城復興基本方針」令和2年4月、沖縄県
- ・「沖縄県首里城復興基金の活用に関する方針」令和2年7月30日、沖縄県

- ・首里城復興基金事業監修会議 第1～7回会議資料、令和4～7年度、沖縄県土木建築部首里城復興課
- ・首里城公園Webサイト 首里城デジタルミュージアム 平成復元の記録



図61 下絵全体図 (長尾恵那 作製)



図62 本彫りの完成 (上原一明 彫刻製作) (全体像)



図63 首里城にて「唐破風妻飾」、「獅子」と共に国へ引き渡す (令和7年1月24日)